

グローバル化のなかの語学教育（その6） —ポートフォリオが綴る学びの過程より—

Study of Globalization and Language Education VI — A Case of English Language Class at the Elementary School Attached to Nara Women's University —

キャンベル 久美子
CAMPBELL Kumiko

グローバル化の急速な進展とともに、これまでの高等教育段階の国際的に活躍できるグローバル人材の育成という括りから更に広がりを持ち、「生涯にわたる様々な場面において外国語によるコミュニケーション能力が必要とされる」^{注1)}時代となる。それに伴い外国語特に国際共通語としての英語によるコミュニケーション能力の向上が大きな課題となる。しかしながら、一方においてそのような課題意識に立ちながらも、他方においては、成果を急ぐあまり、真に大切な外国語を学ぶ意味が置き去りにされ、能力、スキルとしての外国語のみが評価される時代への傾倒も危惧される。

このような状況の中、外国語ということばの教育において、その教育方法を見失わないためにも、子どもの成長と発達を踏まえ、子どもたちが着実にことばの世界を明確にしていける学びを構築することは、これまでも増して大きな課題であるといえよう。

本稿ではそのような意図をもって小学校という初等教育段階の外国語教育について今一度、実践の中から見えてくるものを捉え直すことを試みた。

キーワード：小学校英語教育，文化，ことばと教育，ポートフォリオ，CEFR，
Key Words：English Education for Elementary School Students, Culture, Language and Education, Portfolio, Common European Framework of Reference for Languages

1. はじめに

文部科学省は、中央教育審議会（以下中教審）、教育課程企画特別部会による「教育課程企画特別部会における論点整理について」¹⁾（2015.8）（以下「論点整理」）を軸に、2020年度次期学習指導要領について、現在、その具体化の検討を進めている。

「論点整理」および関連会議資料による学習指導要領改訂の方向性（案）²⁾からは、急速な社会の変化に対応させるべく、次期学習指導要領の内容は大きく変わろうとしていることが窺われる。例えば、これまでの「学力」に代わって、「育成すべき資質・能力」^{注2)}という表現が用いられ、それに関わって子どもの「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざした教育方法である「アクティブ・ラーニング」の導入を重要課題として、新しい時代が求める「資質・能力」を踏まえた評価方法等までが示される。

この次期学習指導要領の方向性（案）が示す「社会に開かれた教育課程」の実現をめざす「何ができるようになるか」という観点には、「何を理解しているか、何ができるか」を常に子どもに問い、さらに問い続けることになり、かつてルソーが説いた消極教育^{注3)}、すなわち、子どもの成長、発達に適った穏やかな教育の流れからは大きく乖離していく可能性を含むことにもなりかねない。

子どもに培うべき能力を分断的あるいは即応的に捉えるのではなく、学びの楽しさや深さを実感しながら、ゆっくりではあるが着実に踏み進んでゆく、一人一人の子どもが中心にある教育の手立て、方法があるのではないか。外国語教育の実践を通してその方法を探っていきたい。

2. 小学校英語教育の流れ

小学校における英語教育について、現在、次期学習指導要領に向けてかなり具体的に内容が固まってきた。文部科学省教育課程部会 2016年6月20日、「外国語ワーキンググループ（第10回）資料3-1」³⁾、さらに8月26日には「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」⁴⁾において、学習指導要領改訂の基本的方向性が示されている。

現行の学習指導要領の成果と課題を踏まえて、これまでの発達段階に応じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度や、情報や考え等を理解したり伝えたりする力を育成することが目標として挙げられ、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能（以下「4技能」）などを総合的に育成することをねらいに、現行の取り組みが行われてきたとして、次にくる「育成すべき資質と能力」が立てられている。

また言語能力の向上に向けて、「国語科」と「外国語活動・外国語科」の連携を強化するための条件整備のなかで、言語能力の向上のためには、言葉を学習する教科である「国語科」と「外国語活動・外国語科」との連携はもとより、言葉で表された内容を学習する教科との連携や、言語活動を行う全ての教科等との連携が求められているとして、学校の教育活動全体を通じての取り組みの必要が提起されている。また国語教育での蓄積を活かして「ことばへの気づき」を促すことも指摘されている^{注4)}。

これらの方向性として、これまでの「聞くこと」「話すこと」に加えて「読むこと」「書くこと」を含む「4技能」、国語あるいは他教科、そして全体を視野に入れた連携を確認して、つぎに新たな指導内容・指導法に対応した評価法に関するポートフォリオについて、CEFR 言語参照枠に対する基本的なものとして捉えられている言語ポートフォリオについて次章で見たい。

3. 欧州共同体からの提言：共通言語参照枠

CEFR とは、文科省が英語教育の確かな基準として取り上げているもので、「シラバスやカリキュラムの手引きの作成、学習指導教材の編集のために、透明性が高く分かりやすく参照できるものとして、20年以上にわたる研究を経て、2001年に欧州評議会（Council of Europe）が発表」⁵⁾ という記述で、文科省資料に解説されているものである。

3-1 CEFR の言語ポートフォリオとは

CEFR の言語ポートフォリオについて概観していく。

CEFR における言語ポートフォリオ（European Language Portfolio: ELP）は、教育・学習ツールである。

ヨーロッパ言語ポートフォリオ（以下 ELP）は CEFR のための具体的な教育ツールで、共通参照枠のレベルを実際の学習の場で用い、学習者が自らの言語習得経験や異文化経験を記録する個人文書であり、同時に「公的な形で認める仕組み」となる。また学習者自身の生涯学習の観点から見れば、言語学習における自律学習ツールとなる。

自身の言語能力や学習履歴を基準に照らして記録する ELP は、したがって学習者のいわば、言語パスポートといえ、さまざまな状況下での証明としての役割を担うことができる。既に、欧州評議会では電子ヨーロッパ言語ポートフォリオ（eELP）の開発も進められ、欧州議会（European Parliament）においては、ELP はユーロパスを構成するものとして判断されている（Europass decision 2004）という位置づけをもつ。つぎにその構成を見ていこう。

3-2 ELP の構成

ELP は、(1) 言語パスポート (Language Passport)、(2) 言語学習記録 (Language Biography)、(3) 資料集 (Dossier) の3つで構成される。欧州評議会が認定する ELP としては、これら3つで構成されることが原則となっている。

- (1) 言語パスポート: CEFR 参照レベル(表1)に基づいた自己評価表 (Self-assessment grid) の6つのレベル (A1, A2, B1, B2, C1, C2) に従い、言語別、技能別に言語能力を記入し、提示することができる。

表 1 共通参照レベル：自己評価表⁶⁾

	理解すること		話すこと		書くこと
	聞くこと	読むこと	やりとり	表現	書くこと
A1	はっきりとゆっくりと話してもらえれば、自分、家族、すぐ周りの具体的なものに関する聞き慣れた語やごく基本的な表現を聞き取れる。	例えば、掲示やポスター、カタログの中をよく知っている名前、単語、単純な文を理解できる。	相手がゆっくり話し、繰り返したり、言い換えたりしてくれて、また自分が言いたいことを表現するのに助け船を出してくれるなら、簡単なやり取りをすることができる。直接必要なことやごく身近な話題についての簡単な質問なら、聞いたり答えたりできる。	どこに住んでいるか、また、知っている人たちについて、簡単な語句や文を使って表現できる。	新年の挨拶など短い簡単な葉書を書くことができる。例えばホテルの宿帳に名前、国籍や住所といった個人のデータを書き込むことができる。
A2	(ごく基本的な個人や家族の情報、買い物、近所、仕事などの)直接自分に関連した領域で最も頻繁に使われる語彙や表現を理解することができる。短い、はっきりとした簡単なメッセージやアナウンスの要点を聞き取れる。	ごく短い簡単なテキストなら理解できる。広告や内容紹介のパンフレット、メニュー、予定表のようなものの中から日常の単純な具体的に予測がつく情報を取り出せる。簡単で短い個人的な手紙は理解できる。	単純な日常の仕事の中で、情報の直接のやり取りが必要ならば、身近な話題や活動について話し合いができる。通常は会話を続けていくだけの理解力はないのだが、短い社交的なやり取りをすることはできる。	家族、周囲の人々、居住条件、学歴、職歴を簡単な言葉で一連の語句や文を使って説明できる。	直接必要のある領域での事柄なら簡単に短いメモやメッセージを書くことができる。短い個人的な手紙なら書くことができる。例えば礼状など。
B1	仕事、学校、娯楽で普段出会うような身近な話題について、明瞭で標準的な話し方の会話なら要点を理解することができる。話し方が比較的ゆっくり、はっきりとしているなら、時事問題や、個人的もしくは仕事上の話題についても、ラジオオアテレビ番組の要点を理解することができる。	非常によく使われる日常言語や、自分の仕事関連の言葉で書かれたテキストなら理解できる。起こったこと、感情、希望が表現されている私信を理解できる。	当該言語圏の旅行中に最も起こりやすいたいいの状況に対処することができる。例えば、家族や趣味、仕事、旅行、最近の出来事など、日常生活に直接関係のあることや個人的な関心事について、準備なしで会話に入ることができる。	簡単な方法で語句をつないで、自分の経験や出来事、夢や希望、野心を語るすることができる。意見や計画に対する理由や説明を簡潔に示すことができる。物語を語ったり、本や映画のあらすじを話し、またそれに対する感想・考えを表現できる。	身近で個人的に関心のある話題について、つながりのあるテキストを書くことができる。私信で経験や印象を書くことができる。
B2	長い会話や講義を理解することができる。また、もし話題がある程度身近な範囲であれば、議論の流れが複雑であっても理解できる。たいいのテレビのニュースや時事問題の番組も分かる。標準語の映画なら、大部分は理解できる。	筆者の姿勢や視点が表れている現代の問題についての記事や報告が読める。現代文学の散文は読める。	流暢に自然に会話をすることができ、母語話者と普通にやり取りができる。身近なコンテキストの議論に積極的に参加し、自分の意見を説明し、弁明できる。	自分の興味関心のある分野に関連する限り、幅広い話題について、明瞭で詳細な説明をすることができる。時事問題について、いろいろな可能性の長所、短所を示して自己の見方を説明できる。	興味関心のある分野内なら、幅広くいろいろな話題について、明瞭で詳細な説明文を書くことができる。エッセイやレポートで情報を伝え、一定の視点に対する支持や反対の理由を書くことができる。手紙の中で、事件や体験について自分にとっての意義を中心に書くことができる。
C1	たとえ構成がはっきりしなくて、関係性が暗示されているにすぎず、明示的でない場合でも、長い話が理解できる。特別の努力なしにテレビ番組や映画を理解できる。	長い複雑な事実に基づくテキストや文学テキストを、文体の違いを認識しながら理解できる。自分の関連外分野での専門的記事も長い、技術的説明書も理解できる。	言葉をことさら探さずに流暢に自然に自己表現ができる。社会上、仕事上の目的に合った言葉遣いが、意のままに効果的にできる。自分の考えや意見を正確に表現でき、自分の発言を上手に他の話し手の発言にあわせることができる。	複雑な話題を、派生的問題にも立ち入って、詳しく論ずることができる。一定の観点を展開しながら、適切な結論でまとめ上げることができる。	適当な長さでいくつかの視点を示して、明瞭な構成で自己表現ができる。自分が重要だと思う点を強調しながら、手紙やエッセイ、レポートで複雑な主題を扱うことができる。読者を念頭に置いて適切な文体を選択できる。
C2	生であれ、放送されたものであれ、母国語話者の速いスピードで話されても、その話し方の癖に慣れる時間の余裕があれば、どんな種類の話し言葉も、難無く理解できる。	抽象的で、構造的にも言語的にも複雑な、例えばマニュアルや専門的記事、文学作品テキストなど事実上あらゆる形式で書かれた言葉を容易に読むことができる。	慣用表現、口語体表現をよく知っていて、いかなる会話や議論でも努力しないで加わることができる。自分を流暢に表現し、詳細に細かい意味のニュアンスを伝えることができる。表現上の困難に出合っても、周りの人がそれにほとんど気がつかないほどに修正し、うまく纏うことができる。	状況にあった文体で、はっきりとずらずらと流暢に記述や論述ができる。効果的な論理構成によって聞き手に重要点を把握させ、記憶にとどめさせることができる。	明瞭な、流暢な文章を適切な文体で書くことができる。効果的な論理構成で事情を説明し、その重要点を読み手に気づかせ、記憶にとどめさせるように、複雑な内容の手紙、レポート、記事を書くことができる。仕事や文学作品の概要や評を書くことができる。

- (2) 言語学習記録：CEFR 参照レベルの自己評価表に対応したチェックリストを用いて、学習者が学習目標を設定し、自分の学習過程や熟達度の自己評価を行い、また学習計画を立てることができるもので、個人の言語日記とも表現できる。具体的には例えば、A1 レベルの「話すこと」やりとり (Spoken Interaction) の項目では、相手がゆっくり話し、繰り返したりしてくれれば簡単なやりとりをすることができる。直接必要なことやごく身近な話題についての簡単な質問なら聞いたり、答えたりできる、とされ、このような例示的能力記述文の表（いわゆる日本で Can-Do リストと呼ばれているもの）をもとに自己評価を行うものである。
- (3) 資料集：学習者が自分の学習言語の熟達度を示すために重要だと考える学習成果を保存する。具体的には、パーソナル語彙リスト、内省資料「ふりかえり」、本・歌リスト、またオーディオ録音ビデオ等、言語学習記録や言語パスポート^{注5)} に関与するものを集める、としている。

3-3 ELP はどのように使えるのか

ELP には、教育的機能と報告的機能の2つの機能がある。教育的機能とは、学習者の内省と自律性を促進し生涯学習を支援するものである。言語学習の過程を記録し可視化することで、内省を通じた自己評価を実現すること、自分の学習に責任を持つこと、さらには学習動機を高めること等が期待される。一方、報告的機能とは、人の移動を保障し円滑にするために、地域や国独自の認定方式を CEFR というヨーロッパ共通の参照枠に関連づけるものである。つまり言語能力の熟達度を共通の尺度で総括的に評価することで、就学や就労に際して言語能力や学習の成果を分かりやすく証明できる。また、それによって透明性を確保することが可能になる。

また、D.リトル⁷⁾は、ELP について自己評価することは自律学習能力を育成する鍵になると重視し、また、学習計画を立て、学習状況をモニターし、学習を評価するという学習過程において、学習の動機づけが実現されていると述べている。彼によると、小学校においては、教室コミュニケーションの典型タイプのチェックリストを作成することから始めて、さらにはメタ認識、メタ言語的能力をつけることができたとしている。

3-4 ELP の受容

ポートフォリオの作成はスイスをはじめ各国で進み、イギリスでは放送大学での活用も見られる。また、ポートフォリオモデルとしてウェブサイトでは、対照年齢 6~12 歳のノルウェーのものが閲覧でき、アイルランド (NCCA : National Council for Curriculum and Assessment) の言語ポートフォリオ (IILT 2004 : Council of Europe Accreditation number 11. 2001)⁸⁾ に例示的能力記述リストがある。一般に Can-Do リストといわれるこの例示的能力記述文は、いち早く日本でも受容されたものであり、さらに現在、文部科学省における教育課程を検討する流れのなかで、多様な評価方法の例として、パフォーマンス評価^{注6)}、ルーブリック^{注7)}、ポートフォリオ評価^{注8)} の3つがあげられ、ポートフォリオが一定の位置を占めている。

3-5 次期学習指導要領との関連で：多様な評価方法のひとつとして

「児童生徒の学びの深まりを把握するために、多様な評価方法の研究や取り組みが行われ」⁹⁾、その一つがこのポートフォリオ評価である。ここでのポートフォリオとは、その説明によれば、「児童生徒の学習の課程や成果などの記録や作品を計画的にファイル等に集積」¹⁰⁾ と記述され、ELP のポートフォリオほどは求められていないが、将来そのような形で発展することも考えられうるであろう。何故なら、英語の習得基準も、Can-Do リストも、その考え方のルーツは CEFR にあるからである。ただ、日本で CEFR の共通言語枠組みが活用されているにもかかわらず、その理念や思想については理解が深まらないとの批判が提示されている。学習者のためのものという見方よりも、教育する側が評価できるものという物差しの評価の観点から議論にのぼっている。

4. 児童とポートフォリオ：実際の小学生の学習過程を素材に

筆者は現在、奈良女子大学附属小学校において、「国際」という枠で第2学年から第4学年までの外国語活動を担当している。この授業内では、児童は個々の学習記録であるノート(My English Notes)をファイル形式で綴っている。これをポートフォリオと位置づけ、筆者が行っているポートフォリオを使った授業実践例を紹介する。

4-1 2学年の学習記録

(1) 実践

2年生は10, 11月に絵本“The Carrot Seed”を取り上げる。絵本の読み聞かせを通して、例えば、father, mother, big brother, a little boyなど身近な語彙に触れている。話の展開には2つの接続詞and, butが効果的に現れる。児童のポートフォリオである学習記録には、絵本からわかった語句「seed, boy, come up, water, carrot, mother, father, but, and (カタカナ表記)」と話の展開の絵が描かれており、そこには語彙を覚えるとともに自身の感動が表現に溢れている。

また、国語教育での言葉の整理のみではなく、小学校の教育活動全体を通じての取り組み、例えば「しごと学習」<冬野菜をそだてよう>の学習において、‘carrot seed’にんじんの種を植えて育てる場面では、まさに絵本の主人公の気持ちと行動を体験的に経験している。

(2) 実践から読み取れるもの

連続的な発展の基準であるCEFRの共通参照レベルにおける話し言葉の質的側面では、使用言語の領域、正確さ、流暢さ、やりとり、一貫性の5つがその構成要素として取り出されている。その中の「一貫性」においてA1レベルでは、「単語の集まりや、個々の単語を‘and’「そして」、‘then’「それで」などのごく基本的な接続表現を使って結びつけることができる¹¹⁾とある。つまり、一つには自然なやりとりを展開するうえで、この基本的な接続表現に慣れ親しむことは重要であるだけでなく、コミュニケーション能力を連続的に発展させる上での基本となる。

表2 共通参照レベル：話し言葉の質的側面¹²⁾

	一貫性
A1	単語の集まりや個々の単語を‘and’「そして」、‘then’「それで」などのごく基本的な接続表現を使って結びつけることができる。
A2	‘and’「そして」、‘but’「でも」、‘because’「なぜなら」などの簡単な接続表現を使って単語の集まりを結びつけることができる。

2年生の子どもたちは、早い時期からアルファベットの歌の歌詞などで、基本的な接続表現である等位接続詞‘and’を使ってきているが、絵本“The Carrot Seed”「ぼくのにんじん」では、ストーリーの展開と相俟って、かなりのインパクトをもって、作中の接続表現‘and, but, and then’を共感的に理解している。また、国語教育との関連でも意識化されている「つながりのことば」として、これらが整理されていると同時に2つの言語をまたいだ言語認識が成立している。

また、言語能力の向上が国語教育との関連のみではなく、小学校の教育活動全体を通じての取り組みが今後の方向性として挙げられている。他教科で展開される学習との関連の中で、他者である主人公の気持ちや行動を共感的に体験することを通して、言語表現に結びついた経験になっている。

4-2 児童が綴る学習史(Language Biography)としてのポートフォリオの例：読書記録ブックの「書くこと」と「示すこと」

(1) 実践例

3年生のポートフォリオに納められている資料の紹介をする。ここでは、その中から絵本4冊の読書記録を紹介する。

ポートフォリオには、2年生「ぼくのにんじん」、3年生「三びきのやぎのがらがらどん」、「おとなしいめんどり」「はらぺこあおむし」、が保存されている。これらはどれも読書記録の形式をとり、本の題名、作者、読書日が英語または日本語で書かれている。

①2 学年の7月1日「The Carrot Seed」¹³⁾ (図1)

これらは絵本の読み聞かせを通しての活動時に作った記録で、現在3年生の児童の、2年生の7月時点での記述である。まず表紙には、英語題名「The Carrot Seed (原文どおり)」、英語日付「July 1, 2015」、内容日本語「大きなにんじんがそだつ話」、作者「by Ruth Krauss」「がつくった」と名前に揃えてあり、中開きの左頁には話のあらすじが日本語で書かれ、右頁「ふりかえり」文には、次のように書かれている。



図1 The Carrot seed

ふりかえり 今日大きな絵本を読んでもらいました。かぞくが「そだたないよ」といったけど、男の子の思ったとうり大きなにんじんが出来るとはびっくりしました。この紙も私の自まんのノートになりました。

ここでは外国語活動、国語科といった教科間の垣根はない。外国語の本を通して、自分の受け止めた気持ちを書くことによる学習の達成感を得ている様子がことばで表現されている。

②3 学年の10月5日「The Three Billy Goats Gruff」¹⁴⁾ (図2)

表紙には、英語による題名「THE THREE BILLY GOATS GRUFF」、三びきのやぎのがらがらどんの絵と日本語での自分の名前が書かれ、中開きには聞き取った英語の単語7語が聞き取った音声のローマ字表記で書かれ、山羊の絵、それに英語による日付が記載されている。

③3 学年の6月15日「The Little Red Hen」¹⁵⁾ (図3)

表紙には、「The Little Red Hen おとなしいめんどり By(色をかえて) Paul Galdon」中開きには21語が書かれ、音声をカタカナ表記し、内2語は日本語で「赤い」「たまご」とある。

残りのスペースに、「June 15, MaTuMuRa ARiSa」とめんどりの絵が書かれている。

④3 学年の10月26日「THE VERY HUNGRY CATERPILLAR」¹⁶⁾ (図4)

表紙には、「THE VERY HUNGRY CATERPILLAR エリックカール Oct.26 MaTuMuRa ARiSa」、中開きには聞き取った英語の単語が33個とくだもの絵が5つ記載されている。



図2 The Three Billy Goats Gruff

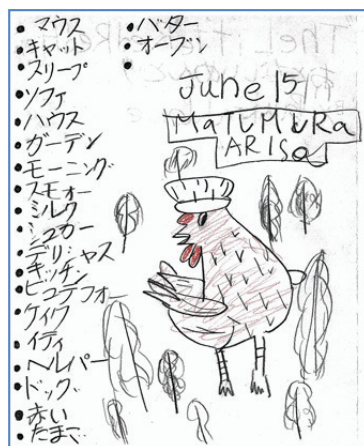


図3 The Little Red Hen



図4 The Very Hungry Caterpillar

(2) 実践から読み取れるもの

主に読書記録を創る「書くこと」と「示すこと」に焦点をあてた児童が綴る学習史 (Language Biography) としてのポートフォリオ例をみてきた。これらには、自分の名前、本の題名や作者、および日付が英語で、時として日本語で記述されている。初歩的な英語の書き写し、と自分の名前を「書くこと」が実現できているが、これらは教師が指示したものではない。当日の読み聞かせの中で知っていることばを書き取ってみよう、というもので、これまでの段階ではノートの書き方は自由で、本の読みを聞いて、知っている、あるいはわかった単語（音）を書き写す活動の記録である。ここでの記録するノートの形式は各自の自由に任せているのであるが、児童たちは既に国語や他教科によって、記録の形式の経験があり、その知識によって、自分の記録を作っている。そして短い時間でそれに絵を書き加えている。

2年生の段階の記録活動には「書く」および「聞く」、「by Ruth Krauss がつくった（原文どおり）」という書き写しと、眼や耳で捉えた記号（形象）をことばにおいており、思考の過程には英語も日本語も等価に働いていると見られる。無意識的な言語間の切り替えが伺える。

また、習得過程の中間として、「red, egg」などは日本語にない音による音連続のためか、聞きながら書くスピードのなかで、音声ではなく無意識にその語の意味が書き取られているのは興味深い。これらの書かれ方を言語習得の視点で観察していくことの意義はあるが今回は取り上げない。

4-3 児童が綴る学習史 (Language Biography) としてのポートフォリオの例：「読むこと」と「示すこと」の学習過程

(1) 実践例

4年生のSさんのポートフォリオに納められている資料から3例を紹介する。

①3学年時の5月13日「The Very Hungry Caterpillar」¹⁷⁾ (図7)

3学年時「The Very Hungry Caterpillar」のストーリーが日本語版と英語版ハンドアウトの2種類綴られている (図7)。

日本語版は、たまご、ちっぽけな、おなかのはらぺこ、りんご、なし、いちご、オレンジ、おおきくての語に下線を引き、カタカナと英語で単語が物の色に沿う形で書き出され、かつそれらが線で結ばれている。

英語版は同じ語が色分けされ、それらは「CATERPILLAR or caterpillar 6, egg2, He3, The2 と That1, Butterfly1, On Monday On Tuesday, On Wednesday, On Thursday, On Friday, On Saturday」が記載され、絵による、はらぺこあおむしの一生（形状の変化）が描かれている。

②3学年時の5月20日「Where Is the Green Sheep?」¹⁸⁾

同じ語を色わけしている。「Here20, Where7, is31, sheep27」等、はじめの2語については、文頭のため大文字で始まっている場合も、文中にあり全小文字で書かれているものも同様の語と認識して分類できている。字形の認識を楽しんで色分けした活動である。

③4学年の11月7日『大使の句集』「Spring」¹⁹⁾ より (図5)

同じ語の色分けをしている。それらは、「前置詞 in, 定冠詞 The the, 名詞 British, Britain, 代名詞 He, he」である。この学習は現英国大使の俳句を切り口に、春について大使のエッセイの抜粋を取り上げ、協働学習の形態で日本語訳に挑戦する活動である。

なお1時間目は、まず辞書を使わずに、知っている語句を見つけて、書かれていることのイメージを描き、2・3時間目からは辞書の使用を許可している。

この学習のふりかえりには、

R さん：大使の俳句を訳していきました。意味を表す単語もあれば、と、は、のを意味する単語もありました。それをはんたいにして、つないでいけたのでよかったです。
 <語順についての気づき>

K さん：(前略)『大使の俳句』を読んで、日本もイギリスもそれぞれすてきな春の色を持っているのだなと思った。イギリスにはバラが、日本には桜の色があってそれぞれ、とてもすてきな色をもっているのだなあとと思った。
 <外国の文化、事象への気づき>

とあり、一人一人多面的な気づきが綴られている。

児童たちは、自分たちの志向性に沿った形で、外国語活動を通して、他国や自国の文化を体験していく。それは経験として積み重ねられる。なお、異なる文化に対照的に触れ、俳句を創り、大使へのメッセージに纏めた(図5)。この活動に続いて、つぎには日本の伝統文化を知るために「香道」を取り上げた活動を展開した。



図5 英国大使 T. ヒッチンズ氏へ
 4年生星組の作品の画像

(2) 実践から読み取れるもの

以上、主に「読むこと」と「示すこと」の学習過程に焦点をあてた児童が綴る学習史 (Language Biography)

としてのポートフォリオの例をみてきた。繰り返しになるが、あくまでも筆者は、学習者自身の学びのふりかえり、あるいは語彙リストなどは授業時の活動資料として使っているが、同時に児童にとってこれらがいかに学んだかの証左になることには変わらない。各自が個性ある方法、感覚で卒業時まで綴っていくことを続ける。感動が伝わる「自慢のノート、My English Notes」(図6, 7)の作成は年間を通じた児童たちの学習成果でもある。ただし、教室での活動は相互的な「やりとり」など音声による活動が中心であり、それらの活動の経過のなかでこれらのノートは自然に生まれるもので、綴るための記録ではない。

以上、小学生のポートフォリオと捉える2年時から継続して使うこのファイルは、学びの証左である。長期スパンで学びを確認する Can-Do リストも含むが、他方、それをノートと呼ぶとき、「身近なことについて、基本的な表現によって」⁶⁾という初歩的な段階として、言葉で言い表されるものと言葉で言い表せないもの「語る」と示す³⁾によって、あるいは「概念と形象」によって綴られた学習の自分史である。言い換えれば、ノートは創作であり、自己表現であり、そこには明敏な感性が常に育つ要素をもつ。そしてさらにいえば、外国語科の目標の在り方でも言及されるグローバル化・グローバル社会という状況によって、より求められるコミュニケーション能力の基盤の重要な鍵もここに存在するのではなかろうかと筆者は考える。

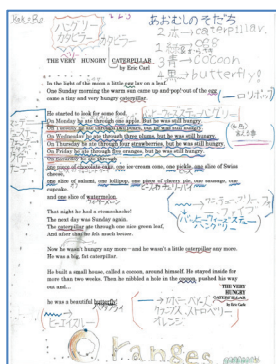


図6 3年時自慢のノート1

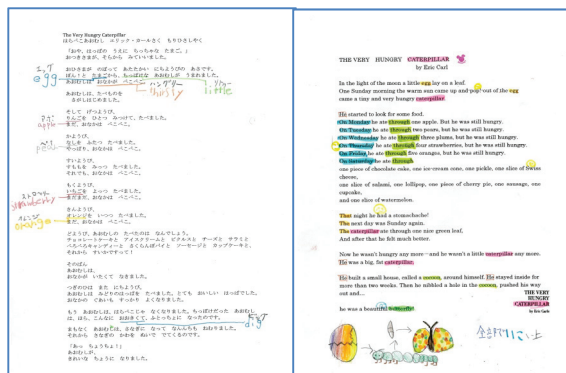


図7 3年時自慢のノート2

5. 結びにかえて

はじめにも述べたように、次期学習指導要領の改訂に向けた指導法として「アクティブ・ラーニング」が大きく焦点化され、それに対応した評価として「パフォーマンス評価」、「ルーブリック評価」、「ポートフォリオ評価」にも、現在、注目が寄せられている。ポートフォリオとは、総括的な評価のみならず、一人一人の学びの多様性に応じた学習の過程における形成的な評価がなされると見られている。一方において、教育内容、教育方法、そして評価の枠が示され、道筋がより具体的に細かく提示されてきているため、子どもの特性、個性にそった方法という視点はよりいっそう大切にしていかなければ、言語スキル習得という即時的結果のみを追いかける状況になりかねない。

大きくはことばを学ぶことを通して、子どもが人間的に成熟する大きな道筋において、均衡のとれた教育の展開は必須である。今回の学習指導要領改訂の方向性（案）においては現在、言語教育の観点で「国語教育」と「外国語教育」の連携と共に、ことばを普遍言語の枠でみることで、広い意味での感性につながることばの教育と、そして外国語を通して、コミュニケーションの基礎が培われることが目指されていると捉えられる。

また、評価の観点材料として着目されてきているポートフォリオではあるが、児童がこれまでの学びの過程のなかから、主体的に創り上げてきているこのファイル形式の綴り／ノートは、教師にとっては、児童の発達段階に応じた教授法の具体的研究材料として、学習者である子ども自身にとっては、自分の学んできた証左として、また自己の学習過程を綴る学習史として有効に機能することを望む。

注釈

注1) 文部科学省「外国語ワーキンググループ（第10回）資料3-1」の「1. 現行学習指導要領の成果と課題」には、「グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている」²⁰⁾と記載されている。

注2) 次期学習指導要領で育成すべき資質・能力の3つの柱として、①知識・技能、②思考力・判断力・表現力等、③学びに向かう力、人間性等が立てられている。

注3) 「子どもの発見」者であるルソーの主著の一つ『エミール』に集約される子ども固有の成長に適った教育を意味する。子ども期の教育の中心的課題は「時をかせぐことではなく、時を失うことだ」と規定している²¹⁾。

注4) 文部科学省「外国語ワーキンググループ（第10回）資料3-1」3. 資質・能力の育成に向けた教育内容の改善・充実には、「言語能力の向上の観点からは、国語教育と外国語教育をそれぞれ改善・充実しつつ、相互の連携を図ることが必要であり、「言語能力の向上につながる効果的な連携につなげるためには、国語科と外国語科の指導内容について、そのつながりが可視化されることが必要である」とある²²⁾。

注5) 拙稿「グローバル化のなかの語学教育文化的多様性と人権尊重の地平」、『奈良佐保短期大学紀要』、20、pp.65-74（2012）に詳しい。既に複数の自治体で「キャリアパスポート（仮称）」という名称での取り組みがあり、同様の主旨のものであろう。

注6) 「パフォーマンス評価」とは、知識やスキルを使いこなす（活用・応用・統合すること）を求めるような評価方法。論説文やレポート、展示物といった完成作品（プロダクト）や、スピーチやプレゼンテーション、協同での問題解決、実験の実施といった実演（狭義のパフォーマンス）を評価する。

注7)「ルーブリック」とは、成功の度合いを示す数レベルの程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語（評価基準）からなる評価基準表である。

表3 多様な評価方法の例 「ルーブリック」²³⁾

項目	尺度 IV	III	II	I
項目	・・・できる ・・・している	・・・できる ・・・している	・・・できる ・・・している	・・・できない ・・・している

注8)「ポートフォリオ評価」とは、児童生徒の学習の過程や成果などの記録や作品を計画的にファイル等に集積し、そのファイル等を活用して児童生徒の学習状況を把握するとともに、児童生徒や保護者等に対し、その成長の過程や到達点、今後の課題等を示すことである。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省：「教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）」、
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf (2016.11.30)
- 2) 文部科学省：平成28年8月26日教育課程部会「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（案）」、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/1377051.htm (2016.11.30)
- 3) 文部科学省：「外国語ワーキンググループ（第10回）資料3-1」、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/058/siryo/attach/1373475.htm (2016.11.30)
- 4) 文部科学省：平成28年8月26日教育課程部会「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（案）」、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/1377051.htm (2016.11.30)
- 5) 文部科学省：教育課程企画特別部会「次期学習指導要領「外国語」における国の指標形式の主な目標（イメージ）案（秋以降、専門的に検討予定）」、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/056/siryo/_icsFiles/afieldfile/2015/10/29/1363262_10.pdf (2016.11.30)
- 6) John Trim, Brian North, Daniel Coste 原著；吉島茂，大橋理枝，奥総一郎，松山明子訳・編：『外国語の学習，教授，評価のためのヨーロッパ共通参照枠（外国語教育Ⅱ）』，pp.28-29，朝日出版（2004）
- 7) Little, David 「The European language Portfolio : where pedagogy and testing meet (2005)」
<http://ja.scribd.com/doc/46425104/David-Little-The-European-Language-Portfolio>(2016.11.30)
- 8) National Council for Curriculum and Assessment : 「European Language Portfolio Primary」,
http://www.ncca.ie/uploadedfiles/Curriculum/inclusion/primary_elp.pdf (2016.11.30)
- 9) 文部科学省：「次期学習指導要領に関するこれまでの審議のまとめ 補足資料（整理中）」
p.17, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/08/29/1376580_2_4_1.pdf (2016.11.30)
- 10) 文部科学省：「次期学習指導要領に関するこれまでの審議のまとめ 補足資料（整理中）」
p.17, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/08/29/1376580_2_4_1.pdf (2016.11.30)
- 11) John Trim, Brian North, Daniel Coste 原著；吉島茂，大橋理枝，奥総一郎，松山明子訳・編：『外国語の学習，教授，評価のためのヨーロッパ共通参照枠（外国語教育Ⅱ）』，朝日出版，pp. 30-31（2004）
- 12) John Trim, Brian North, Daniel Coste 原著；吉島茂，大橋理枝，奥総一郎，松山明子訳・編：『外国語の学習，教授，評価のためのヨーロッパ共通参照枠（外国語教育Ⅱ）』，朝日

- 出版, pp. 30-31 (2004)
- 13) Ruth Krauss : *The Carrot Seed*, Harper Festival (1973)
 - 14) Paul Galdone Classics : *The Three Billy Goats Gruff*, MH Books (1981)
 - 15) Paul Galdone : *The Little Red Hen*, Clarion Books (1979)
 - 16) Eric Carle : *The Very Hungry Caterpillar*, Longman (2002)
 - 17) Eric Carle : *The Very Hungry Caterpillar*, Longman (2002)
 - 18) Mem Fox, Judy Horacek : *Where Is the Green Sheep?*, HNH (2004)
 - 19) ティム・ヒッチンズ:「Spring」, 『TWAIKU eiryu:大使の句集』, pp.8-9, 出版協同社 (2016)
 - 20) 文部科学省:「外国語ワーキンググループ (第10回) 資料3-1」, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/058/siryo/attach/1373475.htm (2016.11.30)
 - 21) ルソー; 今野一雄訳:『エミール (上)』, 岩波文庫, p.125, p.132 (1994)
 - 22) 文部科学省:「外国語ワーキンググループ (第10回) 資料3-1」, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/058/siryo/attach/1373475.htm (2016.11.30)
 - 23) 文部科学省:「次期学習指導要領に関するこれまでの審議のまとめ 補足資料(整理中)」 pp.17, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/08/29/1376580_2_4_1.pdf (2016.11.30)
 - 24) 文部科学省:教育課程部会, 2016. 5.12, 「言語能力の向上に関する特別部会, 資料1 (別紙2)」, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/056/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/05/24/1371093_1.pdf (2016.11.30)
 - 25) 岡本夏木:『ことばと発達』, 岩波書店, pp.105-112 (1987)
 - 26) 松井春満:「人間把握の2つの視点と教育課題」, 皇紀夫・松井春満・和田修二著『人間と教育』, ミネルヴァ書房 (1981)
 - 27) キャンベル早川久美子:「小学校における外国語活動の展開:グローバル化の中の語学教育 (その3)」, 『関西教育学会年報』, 38, pp.221-225 (2014)
 - 28) 文部科学省:「小学校学習指導要領解説編 (外国語活動)」, 東京書籍 (2008)
 - 29) キャンベル久美子:「グローバル化の中の語学教育:文化的多様性と人権尊重の地平」, 『奈良佐保短期大学紀要』, 20, p.77 (2013)
 - 30) キャンベル久美子:「グローバル化の中の語学教育 (その2):小学校低・中学年における導入期の外国語教育」, 『奈良佐保短期大学紀要』, 21, pp.35-49 (2014)
 - 31) キャンベル早川久美子:口頭発表「小学校における外国語教育の展開 (その2)」, 第68回関西教育学会 (2016)
 - 32) ジャン＝クロード・ペアコ; 堀真也訳:「CEFR/CEFR-J の言語共通参照レベル (A1-C2) を導入する言語教育の課題」, 『言語教師教育』, 2 (1), pp.14-19 (2015)
 - 33) ティム・ヒッチンズ:『TWAIKU eiryu-大使の句集-』, 出版協同社 (2016)
 - 34) ヴィトゲンシュタイン; 野矢茂樹訳:『論理哲学論考』, 岩波文庫 (2003)
 - 35) カッシーラー; 宮城音弥訳:『人間-シンボルを操るもの-』, 岩波書店 (1997)
 - 36) ボルノー; 浜田正秀訳:『人間学的に見た教育学』, 玉川出版 (1969)
 - 37) O.F.ボルノー; 森田孝訳:『言語と教育』, 川島書店 (1975)
 - 38) R.ヤーコブソン; 池上嘉彦, 山中桂一訳:『言語とメタ言語』, 勁草書房, pp.101-116 (1984)
 - 39) ローマン・ヤーコブソン; 伊藤晃訳:『詩学から言語学へ』, 国土社 (1983)

